

## ご報告

2025年1月7日、澤畑勉さんが永眠されました。  
今まで雑居まつりを続けることができたのは、澤畑勉さんの功績によるものです。  
ご冥福をお祈りするとともに、今までのご活躍に感謝しながら、故人の遺志を引き継いでいきたいと思っています。

※“世田谷市民運動「いち」の機関紙（第408号 2025. 2. 1発行）に  
投稿させていただいた原稿です。”

澤畑勉さんが逝ってしまった

近藤 浩（雑居まつり実行委員会事務局）

澤畑勉さんを偲び、澤畑さんの足跡のほんの一部だが記しておきたい。

澤畑さんは大学卒業後すぐに世田谷区内で活動するさまざまな団体と連絡を取り、出向き、関係づくりを行った。コミュニティケア、障がいを持つ人が地域で暮らすことができるまちづくりをめざし、活動を開始した。

そして、世田谷ボランティア連絡協議会を立ち上げ、さまざまな団体と出会い、さまざまな方と繋がっていく。自分が繋がるだけでなく、出会った人と人を結び付け、その輪はどんどん広がっていった。

宮城まり子さんがねむの木学園を設立してまだ間もない頃である。まだまだ障がい児の就学免除、就学猶予が当たり前、大人になり親が面倒を見ることができなくなれば、施設で暮らす以外の選択肢がない時代だった。

そんな時代にコミュニティケアを提唱し、まず、障がい者と健常者のかきねを取り払い、一同に会する場を創る、そして、人間対人間として共に生活できる社会をめざすため、行動を起こす。

澤畑さんは日本青年奉仕協会（JYVA）が主催していた全国ボランティア研究集会で毎年、分科会をひとつ任され、世田谷の活動について事例報告を行っていた。

全国から集まって来たそれぞれの地域で活動している、社会福祉協議会やボランティア協会の職員、そして市民運動を推進している個人に向け、「ボランティア活動」の定義の解釈について、当時は定説だった「無償で奉仕活動を行うこと」ではなく「よりよい社会をめざし、考え行動すること」だと提言した。

そして、行政に対し要求するのではなく民間主導により誰もが住みやすいまちをめざし、さまざまな立場の人たちが、出会い・ふれあい・語り合う場づくりのため「雑居まつり」を開催していることも発信した。

その世田谷のボランティアと福祉に対する考え方と実践に共感した全国各地の方々により、名称はさまざまだが「雑居まつり」が全国に飛び火していった。

しかし、数年が経過するとそのほとんどが衰退してしまう。その理由は2つ。参加する団体が同じ考え方で参加しているわけではない。異なった主義主張がぶつかり、分裂、崩壊した。もう一つは、担い手が疲れはて、行政が人とお金を出すことで行政主導に入れ替わってしまった。

澤畑さんは雑居まつりにおいて、この2つの課題を見事にクリアーした。

主義主張がどうであれ、排除することなく、雑居まつりの趣旨である「よりよい社会をめざし、考え行動すること」に賛同するすべての団体を受け入れた。

そして、もう一つは、時代を担う青年たちの育成である。

児童館職員だった澤畑さんは、児童館にくる子どもたちのあるがままを受け入れた。学校で教師とのトラブルをかかえた子、家庭内でのトラブルをかかえた子、友だちとの関係で悩んでいる子・・・そのひとりひとりのケースに対し、きちんと向き合い、じっくり話を聴いてあげていた。

子どもたちは例外なく「今の自分が一番不幸」だと思っていた。澤畑さんはその子らと信頼関係を確立した上で、ほかの仲間たちにその「不幸」を披露する。そんなプライベートなことを・・・と、ハラハラしながら聞いていたが、澤畑さんは気にすることなく、おもしろおかしく笑い飛ばしていた。自分は深刻だと思い込んでいたその悩みを笑い飛ばされ、本人も含めまわりのみんなは、生きていくうえでそんなに考え込むことはないのかな、あいつよりおれのほうがましかな、など、ポジティブな思考に変わっていく。澤畑さんの話を聴いているうちに自然と前を向く活力が湧いてくるから不思議である。

元気を取り戻した青年たちのパワーはすごい。

そんな青年たちが雑居まつりの運営を支えてくれた。そして、今は次代を担う世代を育てている。

雑居まつりが半世紀に渡り続いている理由はそこにある。

澤畑さんは、世田谷ボランティア連絡協議会、雑居まつり、ミニキャブの開発、児童館での子どもたちや青年たちとの関わり、ヒゲと青春の旅、ぼろ塾、日本シーバルク協会、チャイルドライン、などで活動を展開したが、そのすべてが「いのちと人権」に繋がっていた。

私たちがもらったものを返す人はもういない。しかし、澤畑さんは次の世代に返せばいいと言っていた。「恩返し」ではなく「恩送り」だと。

いただいたものが大きすぎるため、どれくらいのことができるか、はなはだ疑問だが、受けた恩の1／10でも1／100でも送りたい。

※ “世田谷市民運動「いち」の機関紙（第411号 2025. 5. 1発行）に  
投稿させていただいた原稿です。”

澤畑さんを偲ぶ会を船橋児童館で開催

橘 直之（雑居まつり実行委員会事務局）

去る2025年3月23日、澤畑さんを偲ぶ会が、船橋児童館で行われました。

会場の受付には、SNSや口コミで会の開催を知った方々が次々と訪れ、受付の名簿に記されただけでも110名を超える方々が参加してくださいました。ご家族の代表として記された方もいらっしゃるため、実際にはさらに多くの方が、それぞれの想いを胸に集われたと思います。遠方からも、近隣からも、多くの方々がそれぞれの想いを胸に集まり、温かい時間を共に過ごしました。

会場には、保坂世田谷区長をはじめ、澤畑さんが長年尽力されてきた雑居まつりの関係者や共に子どもたちの成長を見守ってきた児童館の職員の方々、世田谷ボランティア協会の仲間、プレーパークやチャイルドライン、ボロ塾、シーバルクなど、澤畑さんの交友関係の広さと懐の深さを表したような多岐にわたる顔ぶれが集まった、まるで、大きな同窓会のような、和やかで懐かしい雰囲気の漂う空間でした。

会場となった船橋児童館は、澤畑さんが公務員という立場でありながらも、独自の自由な発想と温かい行動力で「放し飼い公務員」と親しまれ、悩みを抱える子どもたちや、それを支える大人たちに、文字通り寄り添い、共に歩んでこられた場所です。

会では、参加者の皆さんが持ち寄ってくださった軽食などを囲み、船橋児童館での澤畑さんの活動の様子や、子どもたちとの交流を記録したDVDが上映されました。DVD上映後には、澤畑さんと活動を共にしてきた人たちが、それぞれの心に残る思い出や、忘れられないエピソードを語ってくれました。ユーモアを交えた温かい言葉、困難を乗り越えた時の心強い励まし、何気ない日常の中での優しい気遣い。語られるエピソードは、澤畑さんの多岐にわたる活動と、その根底にある深い優しさを改めて私たちに教えてくれました。

参加した人からは、「ひげに見せてあげたい、温かい会でしたね。」とか、「とても懐かしい気持ちになった。」などの声が聞かれました。

そして、「澤畑さんの足跡を、どう引き継いでいくのか。」という、大きな宿題が残されました。

澤畑さんは目立たないところで、私たちを支える役割を自ら引き受けてくれていました。「賛成しなくてもいい。でも、頭ごなしに反対だけはしないでほしい。」というス

タンスでそれぞれの自主性や考え方を尊重しながら仲間を増やしていました。その献身的な支えがあったからこそ、私たちは安心して活動が続けることができたのです。澤畑さんは、まさに私たちにとっての「黒子」であり、活動の要でした。

しかし、澤畑さんのように、常に周りの状況を把握し、必要なサポートを的確に行うことができる人は、そう簡単には見つかりません。澤畑さんが当たり前のように担ってくれていた、あの大きな役割を引き継いでいくことの難しさを、今、私たちは痛感しています。

澤畑さんは、いつも「俺に何かをしてもらったと思うのなら、その恩を返すのは俺ではなく、別の人に送れば良い」と言っていました。見返りを求めず、ただ、困っている人を助け、その輪が広がってほしい。そんな「恩送り」の気持ちが澤畑さんの行動原理でした。

澤畑さんが私たちに遺してくれた、「恩送り」の心、いつも誰かのそばに寄り添い、温かく支えることの大切さ。そして、多くの人々の活動を陰で支え続けたその献身的な姿。私たちは、このかけがえのない宝物をしっかりと心に刻み、それぞれの場所で、澤畑さんの志を受け継ぎ、未来へ送っていけるように頑張りたいと思います。